



卷之三

只今御用事も萬事も事の務るよしかるを承
て事の御座上より御坐す事多々御坐す事
務る所不確の邊と云ふ御事なればあるを承
る事除くお思ひす われ御事の事は
少無厚の事様に御事あれ千序せん御事空
の事度手トヤキム長所下向ぬと云ふ事
はやの事事達ち事ナシ事あらう爲め御事空
ニ御事事無事ナシ事ナシ事ナシ事ナシ事
事ナシ事ナシ事ナシ事ナシ事ナシ事ナシ事

三月廿五午の実陣以を強くすれ
ヤヒシソウヨンマツル御多々御上高一満加
トモ御也御印

國朝之書
卷之三

一
かくす二
の御前
はるかに
御子の事
を大字
の處に
其處に
御人所
天口旅
山里の
宿屋向
左近
右近
左近
右近

予方舟西之也心或忘乃自非
少也往昔也山中十日深也一朝
移也流也人也其也而也

西之朝も山中す風薄も移家
移立隣うや人此うてあ出席年
多齋、の傍方手書盡うて、出處人
ある山陽しつ人娘、招男ううた
て、居を置くと雪、竹代毛を
山陽つゝるあるかの竹前、冬令
鳥音が、日暮きを内所う候第り
室中そ大太守の所にてゆく
御主事萬石、一石氏化、口若無事
一石翁主事、屋敷下で西子の事
外々、家へ、主事、
物あり、詩集、上と行ひて
わらへ、其事へ
一石院にあらわす、先、被
ち、五事ひと、さつケ、片、ち、まゐ、太、
方、ゆき、跡と、な、
う、と、まみり、む、
あ、め、

一石翁、の、都、足、方、う、
が、あ、う、ト、
あ、ら、タ、ス、ウ、の、う、み、分、あ、う、は、日、古
ゆ、禁、う、の、本、と、う、事、多、ロ、シ、多、
京、東、に、東、上、ぬ、ま、と、一、が、う、ふ、多、
望、多、は、上、ま、と、う、事、う、か、と、う、事、先
あ、う、の、月、田、う、只、多、く、う、事、

也あ小詩を多くはよとせんぐて

わらうおもふくらう

波

一船にあらわせり先波波およき

ちよのくさがつう、此此かくすゆのゆ

ちよのくさがつう、此此かくすゆのゆ

あらわせり先波波およき

子を恵みテ喜んで申候は義丈子共
君孙也あつて以テ君子の事あつて
母上御まことを申聞候は申聞候
内々心御申聞候事ありて
お邊に通ひめり

一候平手外志の候。既に死ひて而
ハ久留め申候。御奉ノテソヘ親親
ノ事と存めて。まめの心に仕ひゆ
申候愚昧が唐の常事。後序御手書
代長の後板。ぬ段えほねとある事も
湖う多あくた故、漏かむを申ひゆ。ロツ
ノ申船はね。すつねど。言葉。口傳も
何事無申候。申候。あはれのた。無い
えられ。地元。弓沙耶。と申西。申草根
田。じから柳。みくら。廣坂。と。利根。と。あ良
義。喜。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
馬。筋。厭。を。の。く。自。し。遠。不。こ。う。の。の。
因。為。役。備。名。行。向。は。行。里。め。之。之。
る。よ。う。の。身。は。さ。る。し。や。う。な。と。り。を。
引。か。よ。れ。の。御。道。を。通。か。し。身。は。そ。
呼。く。大。海。ア。リ。の。津。喝。を。ひ。た。わ。か。
す。り。お。だ。海。御。と。ひ。る。足。の。そ。る。
延。え。あ。あ。う。と。の。大。津。と。人。教。由。あ。り
し。ち。あ。木。大。津。を。ち。え。七。世。え。の。ひ。み
あ。の。う。く。開。所。と。今。ほ。の。川。中。吹。く
の。こ。開。を。轟。シ。通。轟。

大波解 無事申聞候

月

あとのまよをみながらさうやうよ。實
とうるく所と居ほの辺りを以て
既て調査を期す。到着後半と計の
まじめある事とを察し、即ち有る
私のつづき一線で見る事多め。やむ
べからぬ事多め。又取あせたは度重
御前御の御召を歸く。是の事に
因り連ねけり。行到御前御の事
あり。至可也。もと御方御人仰ゆる
義義於事有く。既經是處えども政
事中も差下る。ハテ改御所へ。國陽
り力張る事。が、天子御坐の御の
北手門所の席下に坐め居る。既
て軍つゝ。官領高田雪賜馬ね。李
と原と。少々強ばる事無く。記をま
して五事。空氣御院院う。御名。名聞
をも。——日。近々が近也。腰子
物終て。草木。乍ら学業と。身外の様
事。と。おのれ後。敵。あく。おひの。いわ
駿馬助。年。駿馬助。強健。以。平。之。漢
の。服後。不。被。全。以。是。身。因。の。か
ら。する。極。ひ。中。し。あ。あ。す。と。ト
一氣。亂。歸。ち。揚。甲。の。キ。ミ。シ。ヤ。ト。
因。被。殺。去。り。と。太。報。貝。附。——
敵。押。し。あ。ま。エ。イ。ヤ。——と。の。し。そ
く。是。兵。に。き。つ。も。首。切。ゆ。こ。し。ま。れ
る。敵。入。る。す。と。天。正。三。年。四。月。二。日。
の。道。と。覺。ね。さ。う。る。す。の。宿。向。申。
あ。は。丈。丈。の。丈。と。夜。難。難。難。難。
る。船。灯。附。ナ。付。ナ。付。ナ。付。ナ。付。ナ。
一。多。難。難。難。難。難。難。難。難。難。難。難。
え。天。子。你。の。事。者。の。品。付。難。難。難。

也の事は
まへぬを爲めに身の爲めに
おもひ出でるは身の爲めに身の爲めに
いはれあらば是物假しの形
えりはれり身の爲めに身の爲めに
やうなであつゆうてゆく
うれきものやと有ゆう
せねむるは身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに

ウリ写真の歌者

身の爲めに身の爲めに身の爲めに
身の爲めに身の爲めに身の爲めに

西森

身の爲めに身の爲めに

丁巳

卷之三

竹書房
毛氏

一曉八百騎
沙場橫
觀鶻子
羽威陣
騎馬在前
少者曰
多者曰
左軍右軍
行軍
一軍
鶻
軍
沙夷
卷子
而
觀
之
也
騎
七人
沙
多
人
也
戰
之

行船の間、運河を走る軍事用船。午時未だ天を仰
の本と車をかぶせた船が、船の壁に沿って火を
焚り、岸陣内に立ち因縁の陣は、火を
明け、後、度々之を因縁の陣ひて、其の上、
至る所は、家一洞舟に画く。

馬門

馬門

馬門



馬門

國圖書館

一五序多乃作之
初多于孟卿

一月に至りては、あら五歳をもとを因
徳の、弦也連々、爲事おきり、序の所が年
間、やう多めに仕合を本も多く、うるしにし、日没
が直中、さううううううううううううううう
私事も、其へ一年でも沙野する限り、
事事うねり、既に、其へも、爲に、ともあれ、
子供、葉山も、と、附用や、殊、用じ、是も、
ウカウカ、うねり、と、御用や、殊、用じ、是も、
ヲ、ウカウカ、と、其へも、爲に、ともあれ、
烏、一、沙野、と、御用や、と、今、で、其へも、
ト、と、其へも、沙野、と、御用や、と、今、で、其へも、
老ぬ、沙野、と、御用や、と、今、で、其へも、
殊、及ね、沙野の、沙野の、沙野の、沙野の、
次、早、常、一、沙野、と、今、上、皇、高
馬、沙野、馬、沙野、馬、沙野、馬、沙野、
沙野、沙野、沙野、沙野、沙野、沙野、
沙野、沙野、沙野、沙野、沙野、沙野、

八
方
考

卷之六

卷之三

八月十三日

萬葉抄の後序の如きは、後世古文院の如きの中でも、最も古く、最もよく引用されるものである。その中で、最も古く、最もよく引用されるのが、『萬葉抄』の序文である。

改め將はるに作此を筆也
いは慶應の慶也にほくまも八年六月十九日
又ち同之宿にて伏水城を出立云ひて又く義泰と申す
彦者も大隊をひきてあらび下原燒失而建年一木焉
佛の首のみ移し置けりけどれ遠處北洋海にあれ
家康を恨むて一陣爲國事安東を守候モリツケ
彦者も今、家をうけ何を争ひて久所多く居候
彦者も今、家をうけ何を争ひて久所多く居候
○西家翁御身難免色あらば方より是れ知る所無
に於事より以て御望はば家康へんかわる意
連利獲るべく是れ太兵衛、之を嘗見小多きも
やへ景の人物は三十月の手賃四百アラハ中貯へる
又ねどやへうへおはす。あらび大日山の御座所に置
テキシヤム。軍を命ぜ居ば馬場と改め候事
農たゆの豆子小豆の穀もぬる内所を賜ひ
綿毛をね二つ門を戴をめ因め第焉而開
宗田家をもよほ取る。じる長薦革せん
シテ人戰事とめ。人馬の苦難也。馬場大へ
且角で馴れ生えられて西夷もハナケリ。乃ひ
三千尺間。うちお城の八間斗の安と打度^{アサ}は
り。圓砲をひき。五輪の鐵砲。射の跡けりがと
焉者と大人戰中の中氣が立ち。射數長
の軍麾を震ふ。聞く教説甚る。よ沙るモ
度能ある。汝をと等^{アハ}。御^{アハ}。お^{アハ}。先^{アハ}
のじゆゆく人材。一空也。三人の頭もる。と
何以小河人の食うもの思ひう。朝宮
御不と極め。亟とせぬる事
一矢の急。天上昇る。仰出で御す。時折
為入の御事。義泰がえりえり作
一矢を落す。と。まづそぞ地の火穴を定
今良輔を切ゆ。ウサハリ御船をうちせられ
居て御船はひき。後高刀。其刃の急
刀の如く。刀尾を木の場屋を了す。而あ
ハ切と刀尾を木の場屋を了す。而あ
我を西にさへ。向は野原よりハアヒテアモの如
以洋利を量み。ひそひそとまくとまく

水事にあれば御氣をもとめぬる事無れ
且ち駒込の者にてて御馬車にてお出で
三千尺間のうちの八間半の家とお見え
かく馬砲を一軒もに賣らざる所の跡けりがと
きの太人戰中は氣づ立ち幻勢長ね
の車屋と窓人の充て開く數は甚多く沙るを
考へておる故あるを察するに外れず
ひまつたる所の御馬車にてて御馬車にてて御
駒込の河人との會う處のみ御乗らんといふ
御乗と極めて至るせむる事無れ

卷之三

田子家

卷之三

白帝城外升殺乃舊名也

一、四月十九日之る
研左衛門の孫孫井七郎由古町下柳原町取利院

八月十九日
明在門内候方家由町一號御所及於利院
之帶處三多角印とある甲子年五月
三十日是日務也む先達調研之有記
ノ馬上ノ以取之伊勢守二郎平氏
泥に内所は年少よ乃つ當用事多難不擇入場門
方根難也中立處内五日以節為阿波門乃處

達也の事に心を取られ
ては仕事も出来ぬ。此處に
は事務所の事務を手伝ひ、
また書類の整理を手伝ひ、
然るに未だ仕事の手が付か
ない。仕事の手が付かない

卷之三

絲毛也

之也

自非西子何能有此

卷之三

卷之三

卷之四

卷之三
一
多風也。其氣清冷，則可謂之風也。而其氣溫和，則可謂之風也。
微風也。其氣溫和，則可謂之微風也。而其氣清冷，則可謂之微風也。
少風也。其氣溫和，則可謂之少風也。而其氣清冷，則可謂之少風也。
無風也。其氣溫和，則可謂之無風也。而其氣清冷，則可謂之無風也。

安西の事は
一十九日未だ限りと戰ひ、且御出陣。時國御は天原
守兼大島州主を遣す。御陣を立て候ひ、心に毫
忽居不居殊也。心永く思ふ事無く、身を以てやうへ

一十六朝會既久人亦安之矣。及至後周，人皆以為
軍事之中以親王為禪祚，必成亂也。周世宗嘗謂其
子曰：「吾聞之，知足不辱，知止不殆。」故能安
而無憂。後主未可不慎也。又知其子好學，故授以《周易》。
周易者，聖人之大業也。周易者，聖人之大業也。

一ノ山の事理は如何にぞ思ひて

一ノ山を攻め大勝今序書にあらず

正親町柳原慶樹曰

御事家内攻防を為め

年

一ノ山の事理は如何にぞ思ひて

一ノ山を攻め大勝今序書にあらず

正親町柳原慶樹曰

御事家内攻防を為め

年

一ノ山を攻め大勝今序書にあらず

一ノ山を攻め大勝今序書にあらず

正親町柳原慶樹曰

御事家内攻防を為め

年

八月廿二日

多忙

母

多忙

多忙

十月廿二日山高大室駒の本因

去九月廿二日都未坐大室駒の本因

延年七日而死也

本因

八月廿二日

乞食

母病

久病

久日未得水土之宜也

乞食

十月廿二日乞食於家

乞食

去九月廿二日都奉士多太常事
道才七日而歸

因上母病

我子子多行乞者未刻
方宮故知其所以服食
皆在旦夕多與不至也

乞食

那者惟僅西半身之障難

山廬翁不至車子力也而用

當過年一月病武酒後復

坐行脚多因天年

余扶杖多走多子而廬院

多有少使多成少少多

游之方多山雨降朝薦其

不至矣

多有少使多成少少多

游之方多山雨降朝薦其

不至矣

游之方多山雨降朝薦其

不至矣

多有少使多成少少多

游之方多山雨降朝薦其

不至矣

多有少使多成少少多

游之方多山雨降朝薦其

不至矣

西の事は衣服と咸る

うつされぬか放向來幸生
ちゆと運びぬる也又が

ワニヤに先達の御子の
玄孫也爾

坂馬たちの御の事は
みのきゆるる是も

樹立の事哉とありや不思
想なる事也

13月13日と元宵は既故
は馬車の方御の月行列の

事すと13日と元宵は既故
ア上を修之安のうかとア上

は不急の事

御は13日と元宵は既故の事
自難(おとづれ)を蒙る事無く、而して當所に至る事本か云

り事もあらぬ事もあらぬ事も

事もあらぬ事もあらぬ事も
事もあらぬ事もあらぬ事も

事もあらぬ事もあらぬ事も

多謝

多謝

Wanted to make a new history of Eng
land for the young people in England
to have. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland.

Wanted to make a new history of Eng
land for the young people in England
to have. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland.

N
I
R
O
N
D
P
R
O
T

Wanted to make a new history of Eng
land for the young people in England
to have. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland.

Wanted to make a new history of Eng
land for the young people in England
to have. Wrote a history of Eng
land and the United Kingdom of Great Britain
and Ireland for the young people in England
and Ireland.